

## 5月7日 復活節第3主日

使 3:13～19 Iヨハ 2:1～5a ルカ 24:35～48

### 1. 使

v.19 「だから、自分の罪が消し去られるように、悔い改めて立ち帰りなさい。」

私たちは洗礼の秘跡によって神に立ち帰った民であることを思い、感謝のうちに今年も復活節のミサをささげています。

私たちに罪の赦しの洗礼を宣べ伝え、神の国の福音を証しさせるために、復活のキリストは使徒たちを証人としてお立てになりました。このような使徒たちの頂点に立っているのがペトロであり、使徒言行録は最初の教会の誕生と成長の物語りをペトロの連続説教を中心にして展開しています。

イエス・キリストは「聖なる正しい方」(v.14)であり、「命への導き手である方」(v.15)、殺されたけれども「死者の中から復活」(v.15)された救い主である。だから、この救い主に「立ち帰りなさい」(v.19)。

### 2. Iヨハ

「命への導き手である方を(十字架にかけて)殺してしまった」(使 3:15) その罪から逃れて、赦しを与えてくださる祭壇のキリストのところに“立ち帰る”という不思議なことが、教会では起こっていましたが(v.1)。しかもそれは特殊なグループの人々の間でだけ有効であるというようなものではなくて、「全世界の罪を償ういけにえ」(v.2)であると、使徒たちは証言しました。

私たちはこの使徒たちの証言に信頼して、キリスト者としての人生を歩んでいるのです。この世は神を知らず、キリストの福音を受け入れない闇ですが(ヨハ 1:5)、私たちはその闇の中からキリストの光の中へと、この使徒たちの証言によって導き入れられて信じるようになりました。

教会とは、悔い改めて洗礼の秘跡を受けた人々が、主日ごとにキリストの祭壇を囲んでミサをささげている群だと言うことができます。「実にミサの中に、キリストにおいて世を聖とされる神の働きの頂点があり、また人々が神の子キリストによって父にささげる礼拝の頂点がある」「ミサの祭儀は、……全教会にとっても、地方教会にとっても、また信者一人ひとりにとっても、キリスト者の生活全体の中心である。」(ミサ典礼書の総則 1) そのように“信者一人一人が理解している”ということが、この世に満ちるあらゆる困難と反論と不信仰にもかかわらず、教会のミサを今日まで支えて来たのです。

ですから、私たちがミサをささげるということと、キリストの福音を使徒たちが証言している通りに理解するということは、決して切り離すことの出来ないものです。私たちはミサをささげるなら、キリストの福音を理解することができます(v.3)。

### 3. ルカ

vv.36-43

復活されたイエスにお会いした弟子たちは、初めはそれを信じることも正しく理解することも出来ませんでした。

聖書が語るキリストの福音を、そのまま率直に信じたり理解することが出来ない……というのは、決して現代人だけの問題ではないのです。どんな時代の人々にとっても、聖書が語る福音はそのままでは信じることも理解することも出来ないものだったのです。しかし福音の証人として立てられた使徒たちに、復活のキリストが繰り返し現れて親しく語りかけ、彼らの心の目を開いて行ってくださった物語りが、彼らのケリュグマ(宣教)を支えているのです。

vv.46-48

この使徒たちの証言の上に、私たちの教会は立っています。ミサにおいてこの使徒たちの証言である聖書が朗読され、説教され、私たちがキリストのいけにえを記念し、一同でこれに与かるとき、教会はキリストの福音への信仰を現代に向かって宣言し告白しているのです。それは決して隠れて密かに行われていることではなくて、この世のすべての人々に対して公に宣言し告白されていることであり、洗礼の秘跡によって神に立ち帰った民である私たちは、その告白に参加しているのです。

「過越の神秘によって新たにされた人々が、不滅のからだに復活し、あなたの栄光をたたえることが出来ますように。」(今朝の拝領祈願)      アーメン、ハレルヤ。

## 5月14日 復活節第4主日

使 4:8~12 | ヨハ 3:1~2 | ヨハ 10:11~18

### 1. ヨハ

v.11 「わたしは良い羊飼いです。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。」

私たちが今朝もこうして集まって、共に囲んでミサをささげているこの祭壇は、「良い羊飼いです」「羊のために命を捨てて」くださった御子イエス・キリストの祭壇です。教会は、「良い羊飼いです」であって御自身を罪の贖いのいけにえとして献げてくださった、この救い主イエス・キリストの羊の群に他なりません。

イエス・キリストは、なぜ十字架上で死なれたのか……？ ヨハネ福音書は、主御自身が自らその羊である教会の贖いのために命を捨ててくださったということを、ここで説明しているのです。十字架の出来事は、ナザレのイエスの人生に訪れた挫折や敗北ではありませんでした。そうではなくて、それは父なる神の御計画であって、御子イエス・キリストは自ら進んで御自分の命を捨てることによって、父なる神への従順を貫いて、その羊の群である教会を贖ってくださったのです。

### 2.

私たち人間にとって、死ということほど直視することの困難な問題は他にないと思います。一人の人が死ぬとき、あるいは死去したとき、周囲の誰もが“それが当然だ……”とは考えないのが普通です。“もっと生きていて欲しかった”“たいへん残念だ”“まだまだ活躍して欲しかったのに、無念だ”と考え、またそのように弔辞を述べるのが礼に合うと思われています。

兵役に服してとか、国や社会のために働いて、その責務のために戦死や殉職した人の場合でも、やはり周囲の者たちはだれも“それで良かった”とは言わず、“残念であった”“どんなに心残りであったろうか……”と、その死を悔やむことでしょう。

ですから、自ら命を捨てて十字架の処刑を受け入れ、それによって私たちの救い主となった御子イエス・キリストを理解することは、本来この世の常識からかけ離れたことだったのです。

### 3. |ヨハ

「わたしたちが神の子と呼ばれる」(v.1) ようになったのは、私たちがこの十字架と復活のキリストを救い主として受け入れて、洗礼の秘跡を受けたからです。そしてそれ以来私たちは、キリストの祭壇のもとに集まってミサをささげ、贖いのいけにえである御聖体に与かる民となりました。

人間はだれでも生まれながらに「神の子」であるわけではありません。そうではなくて、以前は「神の怒りを受けるべき者」「罪のために死んでいた」者(エフェ 2:3-5)であったのに、洗礼の秘跡によって新しく「神の子」として生まれたのです。

v.1 「御父がどれほどわたしたちを愛してくださるか、考えなさい。」

神は「目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかったことを」(1コリ2:9)、イエス・キリストの十字架と復活によって、私たちのために成しとげてくださったのです。

「家造りの捨てた石が、隅の親石となった。これは神のわざ、人の目には不思議なこと。」(典 87)

#### 4. 1ヨハ

地上でミサをささげている群は、また同時に将来の神の国への復活を待ち望んでいる群です。

v.2 「愛する者たち、わたしたちは、今既に神の子ですが、自分がどのようになるかは、まだ示されていません。しかし、御子が現れるとき、御子に似た者となるということを知っています。」

私たちはキリストの復活の命に与かるようになることを信じているのです。“永遠の命”とは、このような将来への期待を約束するものなのです。

「わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない」(ヨハ 10:16) とイエスは言われました。これは異邦人のことを指しているのですが、正にその異邦人教会こそが、今日の私たちの教会であることを思って、感謝しようではありませんか。

「すべてを治められる父よ、あなたの民を牧し、養ってください。御独り子の血によってあがなわれたわたしたちが、永遠のまきばに入ることができますように。わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。」(今朝の拝領祈願)                      ハレルヤ。

## 5月21日 復活節第5主日

使 9:26～31    Iヨハ 3:18～24    ヨハ 15:1～8

### 1. ヨハ

v.5 「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもそのひとつにつながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。」

今朝も福音書の朗読の後に、私たちは互いに呼び交わしました。“キリストに賛美” “キリストに賛美”、(これは唱えるよりも歌うほうが、もっと良いと思いますが……)。福音書の朗読を聞く会衆のただ中に、復活された主イエス・キリストが来てくださっていることを覚えて、私たちはその御名をほめたたえます。

人はミサに参加することによって、キリストにつながっています。キリストは私たちのミサに来てくださって、その祭壇に与かる群の一同とつながってください。このように、ミサを抜きにしては、私たちは“キリストにつながる”ということを考えることが出来ないし、“豊かに実を結ぶ”ということもミサから切り離しては正しい意味を持たなくなってしまう。

### 2.

聖書の朗読がミサの中で行われるということは、教会にとってとても大切な、いわば基本的な事柄です。主イエス・キリストの死と復活が記念され、十字架のいけにえが再現される感謝の祭儀の中でこそ、聖書は“神のことは”として会衆に語りかけ、聞かれ、正しく理解されるからです。

既に16世紀以来、聖書が庶民のものとなったことは、一面ではたいへん良いことでした。このことに大いに貢献したのが、宗教改革で誕生したプロテスタントというキリスト教の新しい陣営の活動でありました。そのことによって他面、人々は教会に行かなくても、あるいは洗礼の秘跡を受けていなくても、自由に母国語で聖書を読んで、自己流にこれを解釈することが容易に出来るようになったのです。

現在私たちが使っている“新共同訳聖書”は、カトリックとプロテスタントの共同作業によって翻訳されたもので、第二バチカン公会議の「信者に神のことはの食卓の富を豊かに与えるために、聖書の宝庫を今まで以上に広く開かなければならない」(典礼憲章 51) という方針にしたがって、全世界で同時進行した新しい翻訳出版活動の成果の一つです。世界中で、過去の歴史にないすばらしい母国語の聖書を人々が読むことの出来る時代が来たのだ……ということをお伝えしておきたいと思います。

その聖書の朗読を、私たちがミサの中で聞くことが出来ることの大切さを覚えましょう。いろいろな人々が、いろいろな雑誌や書籍の中で、いろいろな聖書の解説をしているのに出会うとき、その語られている解説がもし教会ともミサとも何の関係もない話であつたら、それはちょっと用心した方が良いでしょう。私たちは、復活のキリストにつながって豊かに実を結ぶために、聖書に耳を傾けたいと思います。

### 3. 1ヨハ

ミサをささげる共同体である教会がより良いものに育って行くことは、私たち一同の願いです。それは人間の考えから出たことではなくて、神の子イエス・キリストが命じ、弟子たちに委ねられたことでした。「言葉や口先だけではなくて、行いをもって誠実に愛し合おう。」(v.18) 「互いに愛し合うこと」(v.23) は、このような“教会を造り上げること”を指していて、その中心に主日ごとのミサを大切にすることが念頭にあることは、言うまでもありません。

このミサの中で司祭が唱える奉献文は、聖霊の働きについて次のように祈るのです。「(聖霊によって) …… 御子わたしたちの主キリストの御からだと御血になりますように。」 「(わたしたちが …… )聖霊に満たされて、キリストのうちにあって一つのからだ、一つの心となりますように。」(第三奉献文)

代々の教会は、ミサにおいて会衆一同のうちに聖霊が働いて、教会をより良い群に育てて行ってくださることに信頼し、期待して歩んで来ました。

### 4. 使

そのような教会の中にキリストの福音が継承されて行くために、聖書という聖なる文書群が生み出され伝えられて来たことは、全く神の御業以外の何ものでもありません。人間の思いをはるかに超えた神の御計画が、今日私たちが手にしている聖書を生み出したのだと言うことが出来ます。

そのような聖なる文書群の中で重要な部分を占めているのが、パウロ(ユダヤ名サウロ)が諸教会に宛てて書いた手紙です。このパウロ(サウロ)が使徒たちと自由に行き来するようになった、つまり共に使徒継承の始まりに責任を持つ者となったというのが、v.28の意味です。

いずれにしても、そのようにして生み出され、伝えられて来た聖書を通して、今朝も主イエス・キリストは私たちに語りかけてくださっているのです。 アーメン、ハレルヤ。

## 5月28日 復活節第6主日

使 10:23b~48    1ヨハ 4:7~10    ヨハ 15:9~17

復活された主イエスの記念であるミサを、今朝も一緒にささげることが出来ることを喜び、父なる神に感謝しましょう。感謝の祭儀とも呼ばれるこのミサは、洗礼の秘跡を受けたキリスト者の群に委ねられている権利でもあり、義務でもあります(ローマミサ典礼書の総則3参照)。

### 1. 使

カイサリアの町に異邦人教会が誕生したその起源の物語りを、私たちは今朝の初めの朗読で聞きました。vv.34-35 「そこで、ペトロは口を開きこう言った。“神は人を分け隔てなさないことが、よく分りました。どんな国の人でも、神を畏れて正しいことを行う人は、神に受け入れられるのです。”」

異邦人であったコルネリウスという人が、この新しい教会の中心になって、ミサを司る司祭の役割を果たして行ったことであろうと、私たちは推測します。この教会で使徒たちの福音が正しく継承されていくために、コルネリウスは第一の重要人物であったに違いありません。

洗礼を受けた人々の群である教会のあるところには、主から使徒継承の担い手として召された司教や司祭もまた必ず遣わされているのだということを、私たちは忘れてはなりません。

### 2.

私たちがミサで聖書の朗読を聞くと、神のことはここに集まった“ミサをささげる群”に向かって語られます。同様に私たちが自分の部屋で私的に聖書を開いて読むときにも、これは本来“ミサをささげる群に向かって語られているのだ”ということを忘れないようにしましょう。

先週の聖書の学びで、16世紀以来聖書が庶民のものとなって、人々は自由に母国語で聖書を読み、自己流にこれを解釈することが容易に出来るようになったという話をしました。

第二バチカン公会議後の典礼刷新によって、カトリック教会のミサが“感謝の典礼”と共に“ことばの典礼”を等しく重んじるようになったことは、たいへん重要かつ素晴らしいことであります。それは“聖書から神のことは聞く”ということが、ミサと固く結びついたことであって、特に感謝の典礼から切り離し得ないことを明らかにしたからです。

### 3. 1ヨハ

私たちがミサにおいて、特にその祭壇においてお会いするキリストは、復活のキリストです。私たちがミサに集まるとき、復活のキリストはそこに天から降って来られます。そして司祭の手を通して、御自身のいけにえを会衆の一人一人に与えてくださいます。

v.10 「神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。」

ですから、「互いに愛し合いましょう」(v.7)とは、“みんなで共に御聖体に与かりましょう”という呼びかけを意味しているのです。会衆がキリストの祭壇のもとに集まって、司祭の手を通して御聖体に与かっているとき、彼らは「愛する者たち」(v.7)であり、“互いに愛し合っている群”なのです。

#### 4. ヨハ

そのような“愛し合う群”を育て導くことを、主は弟子たちに委ねられました。使徒と、その後の時代の後継者である教父たち、また司教とこれに従属する司祭たちは、このような教会を育て導く“弟子の務め”を果たすために、復活の主によって遣わされて来たのです。彼らは主に選ばれて、「行って実を結び、その実が残るように」(v.16) 任命された人々です。「互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である。」(v.17) 司祭と会衆はミサを通して互いに愛し合い、そのようにして会衆も共に御聖体に与かって“互いに愛し合う群”へと育てて行きます。

復活のキリストを賛美しましょう。

「主よ、あなたは神の子キリスト、永遠のいのちの糧、あなたをおいてだれのところに行きましょう。」(拝領前の信仰告白)                      アーメン、ハレルヤ。